

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.346



2000 SEPTEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2001年H A J サマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフの配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

尚、パキスタン登山の申請は、年内に行わなければならないので、希望者は早目の申込みにご協力下さい。

記

1. 期間：2001年7月13日(金)～8月27日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。

チベット ニンチン・カンサ(7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。H A Jは既に2回登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間、ルートは1998年にH A J隊が初登攀した西稜を予定しています。

記

1. 期間：2001年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切り：定員になり次第
6. その他：H A Jの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。

表紙写真

党結真拉三山が視界にはいったところを最終到達点とした。山に接近しすぎたため写真のアングルはよくないし、雲が多めなのでタイミングはベストではなかったが、プロファイルを撮ることはできた。最高峰は地図とコンパスにより北東の端のピークであると同定することができた。写真は最高峰(6,060m)南西面。
(文と写真・中村 保)

ヒマラヤ No.346

- | | |
|------------------------------|------|
| 1. 次なる「新しい発見の旅」へ | 中村 保 |
| 14. ヒマラヤ登山者アンケート調査 | |
| 18. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・ヒマラヤから〉 | |
| 19. 井上重治歌集『カラコルム』の特色 | 吉田 漱 |
| 20. スロヴェニアの軌跡(下) | 中川 裕 |
| 23. ヒマラヤ・ジデタル通信3 | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

次なる「新しい発見の旅」へ

はじめに

中村 保

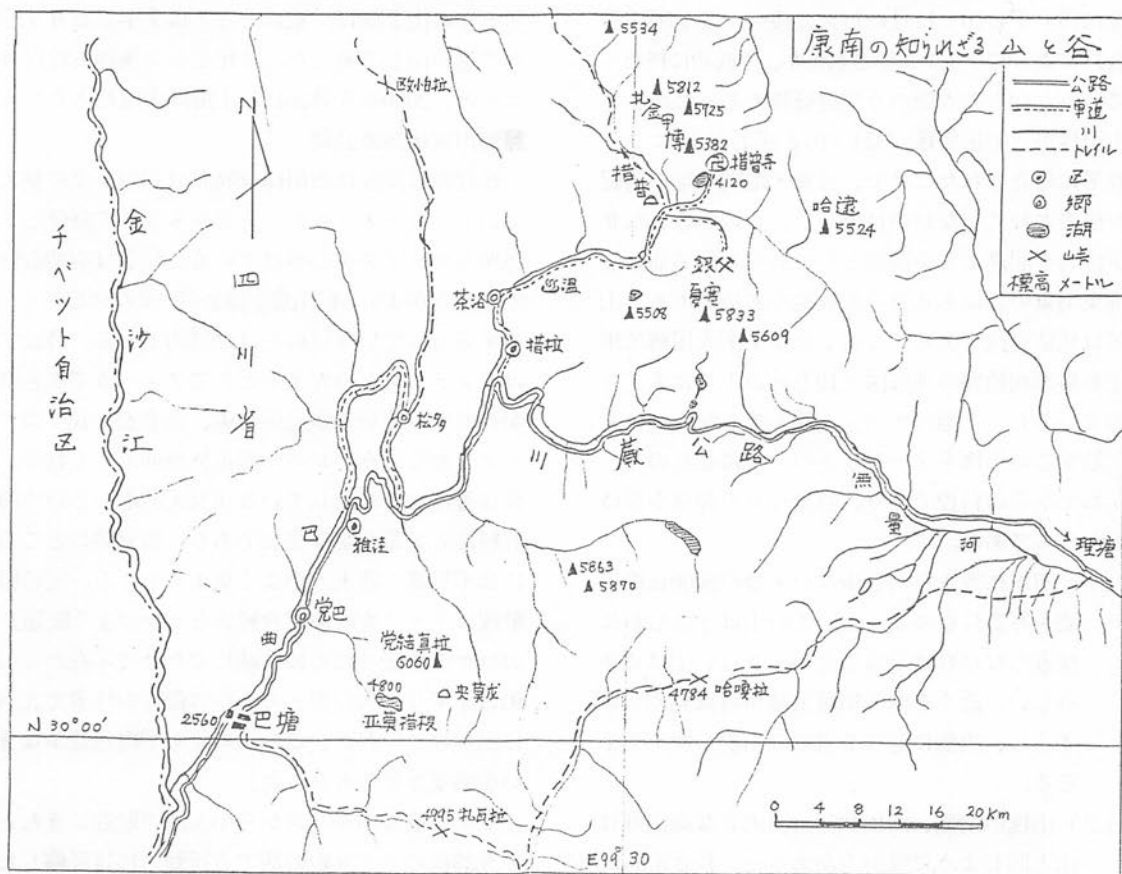
「^{カンナン}康南」とは聞き慣れない言葉だが、旧東チベットのカム地方南部を土地の人たちはそう呼ぶ。チベット族カンパの生活圏であるチベットと四川の境界領域、「川辺地区」は1928年に西康省となった。しかし、1949年の新中国成立後は廃止され、金沙江以西の漢族の少ない地域は西藏自治区の昌都地区となり、それ以东は四川省に編入された。これは清代の行政区画にはほぼ復したことになる。康南は現在の四川省の西端、金沙江の東側の巴塘から理塘高原とその周辺の地域を指す。新中国によるチベット侵攻にもっとも激しく最後まで抵抗した勇猛果敢なカンパの故郷でもある。

2000年前期の計画として、私は目標を康南の未

踏の山域に絞って検討した。この辺りは四川省の山のなかで最も知られていない地域である。時期は5月から6月にかけて四週間、同行者は今回も横断山脈研究会の永井剛（67歳）さんである。馬を最大限利用することを基本に詰められた三つのトレッキングと隠れたチベット仏教院を訪れようという欲張ったスケジュールを考えた。

A. トレッキング：

- (1) 巴塘の東、未登の6060m峰^{ダンチェンラ}の党結真拉山塊と4800mの山上湖
- (2) 川蔵公路の南、未踏の無名峰5870m・相丘切克5863m山塊と高山湖^{ツブ}
- (3) 川蔵公路の北、広大な措普牧場の谷、湖、



僧院をとりまく花崗岩の岩峰と5700 - 5800mの未踏の雪山、扎金甲博^{ジャージンジャボ}（5812m）および夏塞^{シェ}（5833m）

B. チベット仏教探訪：

白玉県のカトー・ゴンパ（呬妥寺）

結果は、ランド・クルーザーの故障と中村の落馬事故（軽傷で済んだ）が重なり、二つのトレッキングを終えたところで切上げざるをえなかったが、天気には恵まれ、満足のゆく印象深い「新しい発見の旅」をすることができた。紀行にはいる前に、長年の懸案だった川蔵公路の難所を解決す

る二郎山トンネルについて現状を紹介しておこう。標高2100m、長さ約4.7kmのトンネルは1999年12月に一応開通したが、トンネル内の舗装工事は半年過ぎた2000年6月現在でも工事中で進捗は遅い。交通は一方通行であり、上り下りが隔日通行となっている。それでも、成都から雅安までの150km弱の高速道路が完成し、雅安からトンネル入口までの道路のコンクリート舗装ができあがったので、成都・康定間は大幅に短縮され、七・八時間で行けるようになった。

近くて遠い山—党結真拉^{ダンチェツェンラ}

■なぜ「央莫龍」なのか^{ヤンモーロン}

ミニヤ・コンカ（7556m）の衛星峰を除いて、四川省のなかでは未踏の6000m峰をもつ独立した山塊は仙熱日（6032m）、ミニヤ・コンカの南の6079m峰、および央莫龍と誤って伝えられた党結真拉（6060、6033m）の3つだけである。党結真拉は1991年の10-11月に日大北桜会（工学部山岳会）によってチャレンジされたが、不成功に終わっている。10人の大掛かりな遠征隊であったが、登山記録が『山岳年鑑 '92』（山と溪谷社）にごく簡単に紹介されただけで、写真・地図・地域情報が公表されていないのは惜しい。このとき、なぜか山名を間違えて央莫龍としている。央莫龍は山塊東南東の谷にある夏の放牧地の名称である。山名は党結真拉である。このことは中国人民解放军総参謀部測絵局の地形図（10万分の1）に表記されているし、土地のチベット族もそう呼んでいる。

私がこの山塊をターゲットの一つにしたのは、かねてからの目標であり、自分なりの発見を期待したからである。

（1）四川に残された数少ない未登の6000m峰の姿を写真に収めること。この山ほどまじかに接近しなければ見ることはできない山はめずらしい。近くを通る川蔵公路からは見えない。さらに、東側に連なる未知の山群も興味をそそる。

（2）山塊の南側、海拔4800mの大きな高山湖は山と同じように吸引力があった。長さ3.5km、

幅1km以上のトルコ石色の碧い湖面に氷河が流れこむ景観は想像するだけでも胸が踊った。事実はまったく予想しなかった展開になったけれども。

何度も訪れた川蔵公路の要衝の街、巴塘から東に直線距離で僅か15-20kmの至近のところに位置するこの山と湖は、私にとっては文字どおり「近くて遠い山」であった。3年ごしの課題を片付けようと、2000年5月26日、上海経由成都入りした。

■四川探検旅游公司

旅行の段取りは四川探検旅游会社がすでに整えている。Eメールとインターネットを駆使して迅速なサービスを心がけている。料金は明朗会計で気持ちがよい。四川登山協会がいまだにEメールすらもっていないのとは対照的である。最近ではラフティングのガイドとしてアメリカで知名度が高くなっている張兄弟の弟、張少宏と我々のガイド、おなじみのレニー陳正林が迎えてくれる。夜は香港から進出している「天天漁港」という海鮮料理店で賑やかな宴会である。張兄弟のところには不思議に欧米人がよく集まってくる。兄の張継躍はアメリカ映画『貴婦人とパンダ』（仮題）のロケを手伝うために三峡にでかけて不在だし、弟のイギリス人の奥さんも世界銀行の仕事で北京に出かけていたが、この日の夜も国際色豊かな集いを満喫させてもらった。

2ヶ月前にベルリンから中国語の勉強にきたという23歳のドイツ娘の活力と行動力には脱帽した。

完璧な英語を話し、中国語も上達している。6月末にはエクアドルのキトーに行き1ヶ月スペイン語を勉強し、そのあとスペインのコスタ・デル・ソルに年末までいて、来年ふたたび中国に戻ってくるという。近い将来、中国に進出している欧米の企業で中国むけのプロジェクト・ファイナンスの専門家として働くことが希望だ。そのためにアメリカのIT関連の有力企業に今からアプローチしている。志向性がきわめて明快で、まったく物怖じせずに、老人の域にいる私に持論を展開する。私も歳の差を忘れて話に熱がこもった。彼女とは前後4日間つきあうこととなった。日本人にこういうタイプはいるだろうか。もっともドイツ人のなかでも自分は変わっていると言っていたが。

次はアメリカの冒険家である。マイケル・マクロー氏、53歳、アメリカの『ナショナル・ジオグラフィック』の協力編集者である。リバー・ラフティングが専門である。今回は他の2人の仲間とラサで合流し、ヤルン・ツェンポー大屈曲部のキングドン・ウオードの「虹の滝」をめざす。昨年(1999)から難しくなった入域の許可は張兄弟が西藏軍区を統括する成都軍区に根回しをしてとっている。しかし、現場では人民解放軍出先部隊の判断次第で目的地に進めないケースも起こりうる。はたして、彼らは屈曲部に近い排龍で足止めを食ってしまった。その付近で川蔵公路が大崩落にみまわれ、人民解放軍が補修工事に出勤しているので、そこを通過できるかどうか分からないのと事前の情報はあった。これが杞憂に終わらなかった。一行は結局ツェンポーにはいることはできず、計画を断念して青海省に向かったというニュースを後から聞いた。東南チベットを狙う旅行者にとっては貴重な情報である。

マクロー氏は昨年も張継躍のガイドで、崗日嘎布山群の北側を流れるヤルン・ツェンポーの支流である怕隆藏布をゴムボートとカヤックで下っている。そのときの記録は“National Geographic Adventure”2000年4月号に紹介されている。その冒頭で、1992年に大屈曲部で北側からヤルン・ツェンポーに流れこむボ・ツェンポーをカヤックで下って遭難死したYoshitaka Takeiに触れており、遭難の詳しい情報を得るために江本嘉伸氏と

コンタクトをとってきたという。私も依頼されたが、この遭難事件は訴訟問題に発展し、まだ決着していないことを帰国後に知ったので、深入りしないことにした。

最後にアメリカの映画会社、アイメックスの責任者から、ロケちゅうのパンダ物語の話を聞く。時代は1936年、アメリカ人の動物学者が四川にパンダを探しにやてきた。しかし、男は不運にも道なかばで病死する。奥さんが意志を継いで中国にやってくる。話題となったパンダ探しに悪人の男が参入してくる。成都にむかう揚子江の三峡を遡るところで先陣争いが起こる。いろいろな事件が絡むが、悪人は身ごもったパンダを殺し、その剥製をアメリカに持ち帰り見世物にする。いっぽう、夫人は殺されたパンダの子供を救いアメリカへ。ドイツ娘に言わせると、善玉・悪玉がはっきりし、ハッピー・エンドのいかにもアメリカらしい映画のようだ。中国でのロケは三峡、九寨溝、黄龍の3ヶ所で行っている。米中20人のタスク・フォースが撮影に携わっている。張兄弟は多面的に協力しており、水難対策に力を貸し、張継躍は竹製の筏を漕ぐ役でスクリーンに登場する。完成が楽しみである。

本題からそれてしまったが、幅広い交流を通じて各方面の情報に接することが「新しい発見の旅」へのヒントを得るきっかけにもなるので、私はこういう機会を大事にしている。お蔭で、中国でみっちり英語の勉強をさせてもらった。

■根拠地ー^{トンバ}党巴へ

5月29日、1日で巴塘まで行くために、午前7時に雅江(2610m)を早立ちする。成都からラサまで2160kmの川蔵公路(南路)はこの区間で最も高いところを通過する。理塘高原を中心に200kmも海拔4000km以上の高地を辿る。その間、4296、4487、4675mの3つの高い峠を越える。気をつけないと高山病の洗礼をうけるところだ。「地表から立ち昇る瘴気が高山病をもたらす原因である、と昔のチベット人は信じていた」と、1877年に通ったウィリアム・ギルはThe River of Golden Sandに書いている。うなずける気がする。高地ではあるが牧草に恵まれ、谷筋は森林が豊かである。石楠花の群落もおおい。青藏高原のなかでは理塘

高原とその周縁は豊饒の土地である。昼過ぎに理塘(4014m)に着く。曇から雨に変わったが、気温2.5度C、寒い。天気は不安定で、3日も雨が降り続けているという。午後4時、海子山峠(4675m)通過。ここから公路は金沙江のへ下り一方の道となるが、1998年の大洪水の爪痕が随所で障害となっていて時間を食う。午後8時、キャラバンの基地となる党巴郷につく。レニーの出番である。中村「今日中にここで馬の手配をして巴塘に

泊まろう。どうするレニー。明日は無理だが、明後日にはキャラバンを出発させたい」

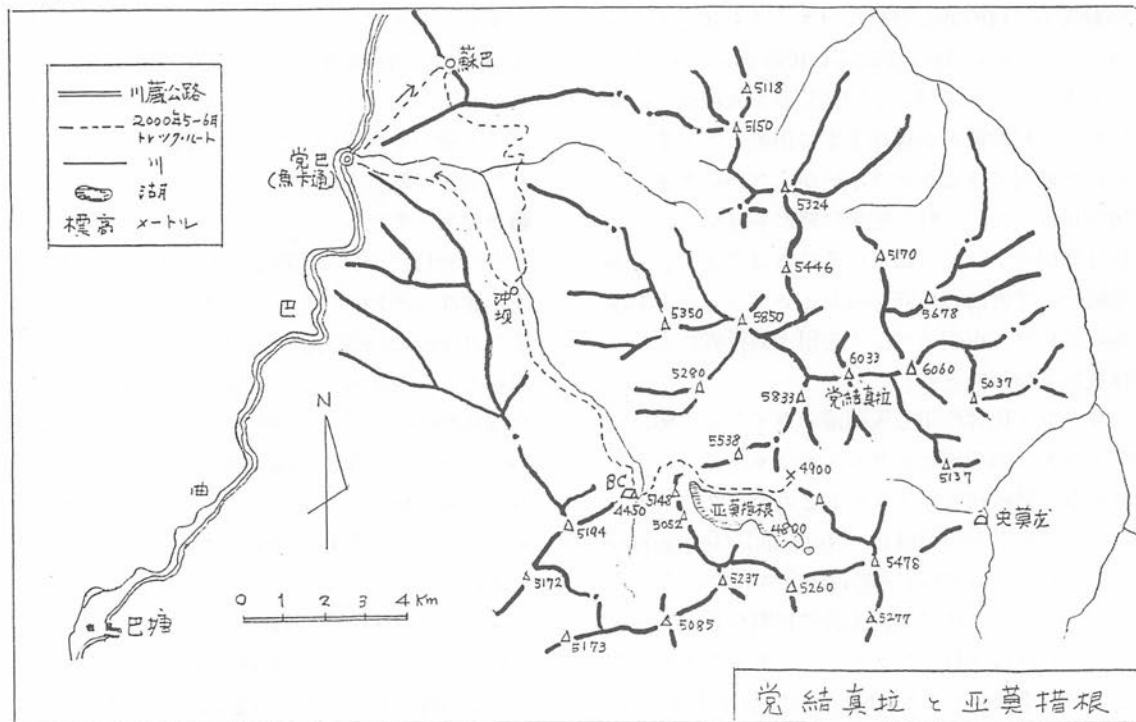
レニー「なんとか努力します。さっき通った郷の小学校で創立30周年記念行事の踊りのリハーサルをやっていました。郷長や役人もきています。まず彼らに話しをして郷の役場に集まってもらいます。そこで状況を把握し交渉を始めます」

お喋りすぎてうるさがられることもあるが、誰とでもすぐ仲良くなる特技をレニーは持っている。知らない辺境の土地に行ったときに威力を発揮する。交渉の勘どころを押さえ、相手の反応を上手に忖度し、結論をこちらの希望どおりに誘導する。

30分も待たないうちに、郷長、共産党書記他2人の役人がやってきた。みなチベット族である。郷長の達哇さんは若くてなかなかインテリである。我々の旅の目的はいちいち私が説明するまでもなく、レニーが代行する。その時、写真と紀行を日本の雑誌に載せ、皆さんの土地を日本人に知ってもらおう心がける、と強調する。こうして話しは一時間半ほどでまとまった。ポイントを要約する。

- (1) 今の時期、馬は高地の放牧場にいらっているので、村で馬を集めるのは容易ではない。
- (2) 冬虫夏草の最盛期でもあり、村人はほぼ総出で4000m以上の高地に採りにゆくので、ポーターの確保も難しい。
- (3) そんな状況なので簡単にはゆかないが、なんとかする。明日の朝、上の村に伝令をだし、馬10頭、馬方2人を用意する。党巴出発は明後日午前11時とする。したがって9時にはきてほしい。
- (4) 郷政府側の案内兼調整役として共産党書記の江措さんが同行する。

レニーの狙いどおりに一応まとまった。我々を監視する役目も負っているのだろうが、書記の参



加は、個人旅行者が身の安全をはかるためには大いに役立つ。危機管理のための保険と考えてもいいだろう。午後九時半に党巴を辞して巴塘（2560m）にくだる。金沙江はもう近い。

5月30日、巴塘で休養。晴れ間が出はじめる。好天のサイクルに入るのだろうか。青空が広がり、気温も急上昇する。谷筋は暑い。3年ぶりにラマ僧院を訪れる。修復が進んでいる。

奥の院にグライ・ラマの写真が堂々と飾られている。政府に咎められないのだろうか。街には理髪店が多い。髪シャンプーとヘア・マッサージが200円、丁寧なサービスが心地よい。

■近くて遠い道-B.C.へ

5月31日、午前7時半、早めに巴塘を発って、1時間弱で川蔵公路を党巴郷の役場に戻る。東側の尾根から馬四頭とヤク1頭が下りてくる。我々のためと思いきや、役場にある製粉機で炒ったチンコー（大麦）を挽いてツェンパの粉にするためである。そうこうするうちに、我がキャラバン用の馬が到着したが5頭だけである。それだけしか集められなかった、もう1日待ってくれという。が、出発を延ばしたからといって保証はない。書記もお手上げの様子である。

中 村「チンコーを挽いている一行を雇えないだろうか。すぐ交渉してくれ」

レニー「彼らは別の方角の村から来ているようですが、書記と一緒に頼んでみます」

結果は上々だった。上の村まで、半日だけ荷物を運んでくれることになった。馬9頭、ヤク1頭の編成で、10時半に党巴を出発することができた。党巴の河岸段丘から東にはいる谷の南側の尾根沿いにトレイルが上っている。この道は幾つかの村落を通りB.C.予定地、さらに山上湖の北側を辿り央莫龍に続いている。地図のうえで確かめた今回の予定コースである。ところが、キャラバンは谷の北側を登りはじめた。不信に思ってレニーに正したところ、書記はこちらのほうがよい道だという。2時間半の急登で蘇巴（3500m）という24戸ほどの村に着き、馬方の家で昼食をとる。

どうしても釈然としないので、書記に地図を示してルートの確認を求めたところ、彼は間違いに気付いた。谷を挟んで南側の道に行くべきであった

と。戻るか、谷を横断するか、決断を書記に迫る。党巴に戻ったら、馬の調達がますます難しくなる。こみ上げてくる怒りを抑えているうちに、目的地が遠ざかって行くような喪失感に襲われる。レニーも判断のしようがない。助っ人できてくれた馬4頭、ヤク1頭は帰っていった。1時間半ほど経って、書記と馬方が相談した結果が伝えられた。彼らの決定は、党巴には戻らない、厳しくて遠回りだが巻き道を行って対岸の村に必ず今日じゅうに着く、追加の荷駄はこの村の村長に頼んだ、という気合のはいったものだった。馬七頭、ヤク2頭の構成で午後3時半に蘇巴を出発した。馬に乗ったり下りたり、不安定なガレ場のトラバース、ゴルジュの横断、胸をつく急登の難所を経て8時半に対岸の沖壩（3740m）に着いた。10戸ほどの落着いた村である。チベット族の農家に世話になる。蘇巴からきた馬2頭、ヤク2頭はこの先には行かない。ふたたび荷駄の手配を主人に頼むが、沖壩の馬やヤクは高地の放牧地に行ってしまうという。が、村長がたいへん親切な人だった。冬虫夏草採りに忙しい村じゅうの人たちに諮って、なんとか7人のポーターを確保してくれた。疲れきって寝袋にもぐりこむ。チベット族の家は不潔感がなく居心地がよい。この村の名称は2つある。行政上は沖壩であるが、土地の人たちはトンボチェと呼んでいる。地名を確かめるときの面倒さをここでも体験させられた。

6月1日、晴、午前8時8度C、清々しい朝だ。東にむかって美しい溪谷が緩やかに上り、やがて顕著な二つの大岩峰に阻まれ、源頭は右に折れて南に延びている。岩峰の向こう側に目的の高山湖、^{ヤモ・チョーキン}亞莫措根（4800m）があるはずだ。村のすこし先の対岸には見事な針葉樹林帯のなかに桑登寺という立派な僧院がある。1840年代に創建され、現在の老ラマ（70歳）は16代目であり、16人のラマがお勤めをしている。

午前10時、キャラバンの揃踏み。馬5頭、ポーター7人をいれて総勢14人。ポーターは村長から若い娘さんまで、老若男女が我々のためにかき集められた。私と永井さんだけが馬に乗る。道は谷の左岸の針葉樹林帯を上る。石楠花がおりしも満開である。上るにしたがい、樹林帯まばらになり

牧草地に変わってゆき、無人の放牧小屋が現れる。正面の岩峰と左に連なる岩稜がじょじょに迫ってくる。その奥に雪峰が見え隠れする。天気は晴れたり曇ったりで、小雨がぱらついたりだが、おおむね安定している。昨日とうって変わり楽しい行程である。ポーターたちは慣れない荷担ぎにかなりあごをだしていたが、互いに助け合い、気持ちよく頑張ってくれた。

午後2時半にB.C.着。大岩峰の下、谷を挟んで左岸の放牧小屋をベース・ハウスとし、2張りテントを設営する。海拔4470mの地点である。B.C.に落着く暇があらばこそ、馬方から新たな難問を突きつけられる。明後日の朝帰らねばならないという。近隣の村と一緒に馬を高所の放牧地に移動する予定が組まれていて、これは共同体の仕事なので最優先しなければならない、と一步も譲らない。我々は、天気しだいでは数日B.C.に粘るつもりでいたので、梯子を外されてはたまらない。ポーターの調達もこの季節は困難である。金は上積みするからなんとかしてくれと、書記をつついたが殆ど効果はなかった。それでも、明後日の夕方まではB.C.にいてくれることになった。B.C.では家庭用のLPガスと高圧釜が威力を発揮する。夕飯はホワイト・シチューをメインに、スライス・

オニオンとツナのサラダも忘れずに、とレニーに献立を作らせる。

■天上の世界へ

6月2日、晴時々曇、午前7時半3度C。夜中に雲が広がったが、朝になって晴れてきた。気温も下がった。天気はだいじょうぶだろう。残された時間は少ない。「晴れ男」の運に賭ける。山上湖へのトレイルは、B.C.からいったん谷の流れを徒渉し正面に圧倒的に迫る大岩峰(5418m)の裾の灌木帯を左手にトラバースし、急なガレ場にを左斜め上に一直線に上る。2頭のヤクが登ってゆく。道はいったん支尾根の平坦地へでて、湖の出口に向かって沢筋を辿る。雨期には泥濘になるところらしい。

午前8時半B.C.を出発する。馬でゆく。出だしで永井さんが鞍ごと落馬するが怪我はなし。B.C.からさきは馬が人を乗せて行ける道ではないと書記は言っていたが、いきなり高所で、歩いて登ったら老人組には時間がかかりすぎるので、強引に馬に乗せてもらった。ガレ場の急登では馬は喘ぎ、不安定な足場でスリップの危険もあったので、下を見ないでひたすら馬にしがみついて上っていった。1時間ほどで平坦地(4600m)に着き小休止。黄色いメコノプシスがたくさん咲いているが、



▲亞莫措根（ヤモーチョーキン）4,800mの高山湖

「青いケシ」は見つからない。20分ほど休んで、さらに岩のごろごろした湿地帯を直登して、10時半頃二つの大岩峰の間にでた。そこは尾根の鞍部ではなく、山上湖の唯一の落ち口になっているところであった。海拔4800m、まったく想像もしなかった景観に文字どおり固唾を呑んだ。

私は峠の東に氷がまだ多少残っている青い湖が展望されることを予期していた。が、目の前に現れたのは異様と言える光景であった。湖は全面凍結している銀白の世界である。一瞬ポリビアのアンデス高地かアフリカのエチオピアの塩湖を連想した。すでに6月上旬の初夏である。1日歩いて下れば、金沙江の乾いた熱風が暑い。自然の変化の大きさ、東チベットいや四川のカム地方の景観の急激な落差にあらためて感じいった。私にとってはかけがえのない「新しい発見、未知との遭遇」であった。人民解放軍の地図（10万分の1）に載っている高山湖の名称は亞莫措根。「亞莫」は湖の名前、「措」は湖の普通名詞、「根」は「大きい」を意味する、と沖壩村の村長が説明してくれた。ちなみに、『山岳年鑑 '92』の日大隊の記録には、この湖のことは一言も触れられていない。

馬は湖の落ち口からB.C.に引返す。我々は党結真拉の最高峰（6060m）を写真に収めるために、央莫龍へむかう湖の北側のトレイルを、湖面を右下に見ながら東へ歩く。いきなり5000m近い高所のトレックは高度順化していない身体にはきつい。65歳の私より2つ上の永井さんのほうが、日頃のトレーニングの賜物か、足取りがしっかりしている。湖面に雲が乱反射して眩しい。時々へたりこむ。雲の変化が早い、晴れ間もでる。

12時半、党結真拉三山（西から東へ5833、6033、6060m）が視界にはいったところを最終到達点とした。山に接近しすぎたため写真のアングルはよくないし、雲が多めなのでタイミングはベストではなかったが、プロフィールを撮ることはできた。最高峰は地図とコンパスにより北東の端のピークであると同定するができた。さらに東に進み、央莫龍への5100mの峠を越えてその先まで行き、最高峰の南面を覗けばもっと細かい観察ができたろうが、体力が許さなかった。ここまで来ることができたことを書記の江措さんも感激している。眼

下に広がる6300-5400mの山々に囲まれた神秘的な凍る湖はチベット族の彼にとっても自然の驚異と映ったようだ。なを、党結真拉は3つのピークを総称する山塊の名前であると村長があとで説明してくれた。

1991年の日大隊の行動に触れておこう。公表された唯一の簡単な記録を『山岳年鑑 '92』から引用する。

「偵察隊を南北両面に出した結果、北面からの登路採用を決定。10月22日、林場一桑 西下午場(4200m)にBCを置く。23日から北面ゴンペゴ・ルートの活動を開始。C1を5200mに設け、続いて5500mにC2を設けるべく活動を続行。しかし11月に入り予想以上の夜間の降雪と日中の雪崩の激しさに、約2週間の活動もむなしく、5450mを最高到達点として断念した。」とある。私は北面には入っていないので、批評はできないが、アプローチや登攀ルートを10万分の1の地図上で確認できないのは残念である。一方、私が見たかぎり、南西面からの登攀はさして困難ではなさそうである。

我々は午後1時半、引きかえす。3時、湖の落ち口から下りにかかる。2度とふたたびこの凍結した山上湖を見ることはないだろう。去りがたい気持ちになる。人に知られたくない宝物のように思えてくる。5時B.C.に帰着。疲れきった身体を休めていると、また馬に関する知らせが来る。B.C.に残しておいた2頭のうち1頭が行方不明になってしまった。夜遅くまで馬方と村長が手分けして探したが見つからなかった。翌朝早く探しにゆくという。我々は翌日の午前中は南に延びる谷の源頭をつめようと計画していたが、馬の失踪で駄目になってしまった。最後まで馬のことで苦労が絶えなかった。

6月3日、夜中に雨が降り、遠雷も聞こえた。午前6時半、3度C。曇後晴。早朝から馬方たちが馬を探しにでかけ、9時に馬を連れて戻ってきた。一件落着である。今日は党巴まで下り一方なので、馬には乗らない。10時にB.C.を出発する。一応の成果を挙げたので、心地よい満足感に浸りながらゆっくり歩く。途中、沖壩の村長さん宅で昼食、マントウを蒸かし、家族で歓待してくれる。最短距離の尾根道を党巴へ下る。途中まで親切的な

村長が我々を送ってくれた。ほんとうに気持ちの優しい人たちだった。午後五時半党巴に帰着。書記の江措さんとはここでお別れ、出だしの間違いはあったが、誠心誠意やってくれた。ありがとう。郷長の達哇さんに協力を謝し、経過報告をしてか

ら巴塘に向かった。午後七時巴塘着、民営の新しい金穂賓館に泊まる。シングル・ルームで一泊70元(900円)、県政府招待所よりはるかによい。第一ラウンドが無事終わったので、巴塘で一日休養する。

ソ プ ジャー ジン ジャボ 秘境の景勝地―措普牧場と扎金甲博

■新しい発見の可能性

中国南西辺境への旅はもう10年間続いており、今回は19回目である。が、措普牧場とその周辺を計画にいったのは具体的な情報に基づいてではなかった。地図の上で、川蔵公路の海子山峠のすぐ北側に聳える夏塞(5833m)の北西に海拔4000m以上の広大な谷があり、措普牧場と記されている。谷の北側には最高峰5812mの扎金甲博と呼ばれる山塊があるらしい、という程度の知識しか持ちあわせていなかった。ところが、「灯台下暗し」である。通いながた川蔵公路のすぐそばに隠れた楽園が存在していたのである。横断山脈についての多少思いあがった自負が脆くも消し飛ばされた。と同時に、カム地方の奥行きを再認識させられた。

そのきっかけを提供してくれたのは党巴の郷長である。彼の説明は明快であり、情報は正確であった。

- (1) 措普牧場と周囲の自然環境は巴塘県のなかで最も風光明媚である。
- (2) 広々とした美しい牧草地、雪山と岩峰、原生林、青い湖が見事に調和している。
- (3) 七百年の歴史をもつ紅帽派の僧院、措普寺付近の景色は九寨溝にも匹敵する。
- (4) 夏塞の北側にある銀鉱山のために車道もつぐられ、アクセスが容易である。
- (5) 巴塘県政府は観光開発のための投資を前向きに検討している。

我々は期待に胸を膨らませて、迷わず措普牧場に向かうことにした。地図によれば、車道は川蔵公路の措拉区分岐点から7kmの茶洛までだが、実際は45km先の措普寺まで車で入れることが分かった。往復4日の馬のキャラバンをしなくてすむ。そうとうの悪路だが車なら3時間で行ける。郷長

が親切にアドバイスしてくれた。

6月5日、晴。午前6時半17度C。じつに爽やかな朝である。7時15分巴塘出発。1日で措普牧場まで行くために早出する。この時間では、街の飯屋はふつうまだ開いていないので、前の晩に特別に頼んでおく。我々の朝飯の定番はお粥・包子(肉まん)・大根漬物・ゆで卵・お茶でる。しんどうい辺境の旅行中で、胃袋が一番素直に受けいれてくれる食べ物である。1日の活力の素をしっかりとる。

川蔵公路を戻る。党巴を通過し10時15分措拉区分岐点(3300m)から北にむかう溪谷の左岸沿いに茶洛への道をゆく。措拉区は経済的な基盤があるようだ。鉱石処理工場や水力発電所があり、区を中心は小さな街の体裁をととのえ、郵便局もある。11時に茶洛に着く。行政的には巴塘県措拉区茶洛郷である。車を郷政府事務所の中庭に停めて、関係者に挨拶をする。例によって、ここからはレニーの仕事である。郷長は巴塘に出かけて不在だったが、共産党書記の阿珠さんが快く対応してくれる。バター茶と昼食を振舞ってくれる。豚のベーコン・野菜炒めと高圧釜で炊いた白飯。美味しくいただけた。好意が嬉しい。我々のトレッキングについても全面的に協力してくれた。郷政府から役人の李朝剛さんが同行してくれることになった。この辺は大半がチベット族だが、李さんはお母さんがチベット族、お父さんは漢族である。1993年に巴塘の高校を卒業し、しばらく軍隊に勤務したあとここにきた。普措牧場ではチベット族の「馬のドクター」を案内に付けてくれることになった。安全保障の上で用意万端である。

書記の阿珠さんの話しは党巴の郷長が言ったことを裏付けてくれた。さらに幾つか、レニーを通して補足してもらった。

レニー「中村先生たちはこの景勝地を日本の雑誌で紹介し、観光開発にお役にたちたいと言っています。ところで、今までに外国人が入ってきたことがあるでしょうか」

阿 珠「有難うございます。外国人については、3年前に四人のイタリア人が銀鉱山を訪れました。しかし、登山やトレッキング、あるいは自然の写真を撮りにきた外国人は中村先生たちが初めてです。なを先月に中国のT/Vチームが入りました」

レニー「自然環境について一言お話しください」

阿 珠「巴塘県として自然保護区に指定しています。特に措普寺の下の湖は周囲を原生林に囲まれ、野生動物が豊富です。麝香鹿、鹿、熊などが生息しています。捕獲は厳禁です。措普寺のラマは湖の魚の餌付けをしています」

レニー「銀鉱山の概要を知りたいのですが」

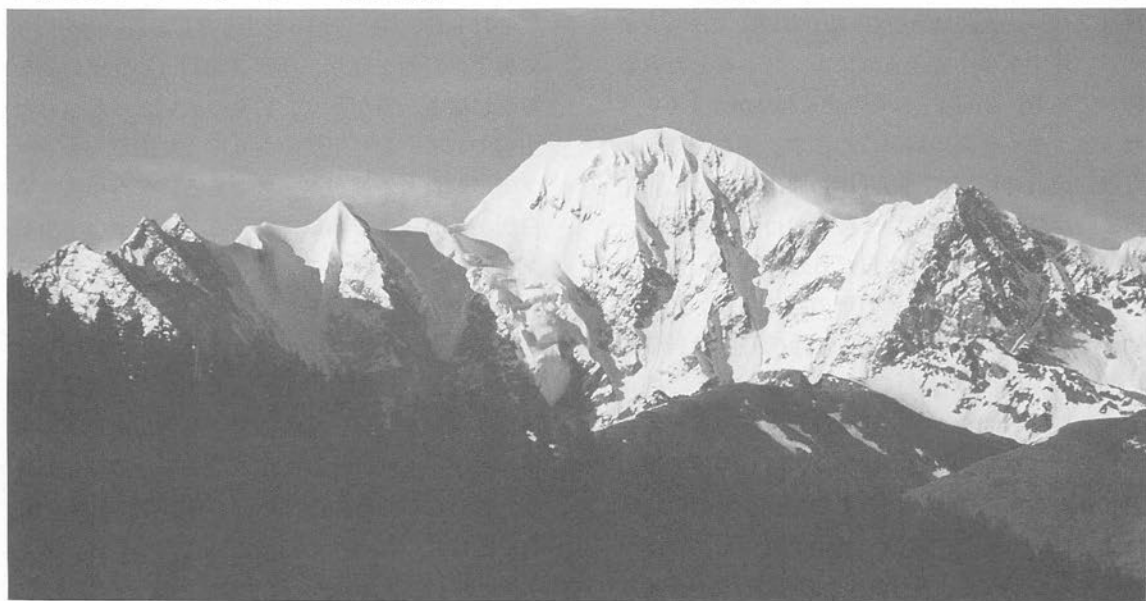
阿 珠「銀が主で、亜鉛も採れます。銀の埋蔵量は大きいと聞きます。現在、7～800人が鉱山で働いており、年間約20,000トンの精鉱を産出しています」

■措普牧場一隠れたるラマ僧院へ

12時半茶洛を出発する。溪谷の左岸を上ってゆく。途中に温泉が湧いている。チベット族も温泉が好きらしい。2人の老ラマが露天風呂につかっ

ている。若い娘さんでないのが残念。谷の両岸は針葉樹と樺の木で松茸がたくさん採れそうだ。前方と、左右の支谷の奥に5000mクラスの雪峰、岩峰が現れはじめる。右岸の村の中央に立派な僧院がある。所寺という名前で措普寺と関係が深い。やがて右岸に崩れた石が1つだけ昔を暗示するように残っている。悪路が続くが、鉱石運搬用のインフラである。補修が継続的に行われている。調子のよくないランド・クルーザーがストップ、ついにエンジンがからなくなる。運転手の金晶(31歳)は修理の知識・経験とにもない。懸念が現実になった。折りよく近くで工事中のロード・ローラーのチーフにレニーが頼みこみ、点検をしてもらった。総出でチェックしてくれ、幸い30分程で動いた。帰るときも対向車のトラックの人たちに助けられた。地方のチベット族の親切さには、ほんとうに頭がさがる思いがした。共同体における相互扶助の美風が失われていないのだろう。忘れがたい体験であった。最悪のばあいは車を乗り捨て、何も考えざるを得なかったのである。

午後には夏雲の通り雨もあるが、天気は安定している。茶洛を登って3時間も過ぎたろうか、溪谷が終わり、谷は広大で平らな牧草地に融合する。海拔4050～4100m、西北西から東南東へ長さ20km、幅2～4kmの茫漠たる開けた草原が展開する。黒テントの遊牧民の世界である。その中心が措普牧



▲夏塞(シアシェ 5,833m)北面。措普寺より

▼扎金甲博山塊の最高峰(5,812m)南東面、措普牧場より



場と名づけられている。午後4時、車から降りて360度見渡す。北側の正面にパタゴニアのフィッツ・ロイを彷彿とさせる花崗岩の岩峰群がひときわ注意を引く。四姑娘山の岩峰群にも共通することだが、氷河がないのが惜しい。山裾に点在する放牧基地の数戸の村落からカンパたちが集まってくる。早速、阿珠さんが予定の案内人「馬のドクター」を探して連れてくる。

まだ陽が高いので、措普根巴（寺）へ向かう。草原を蛇行する川に架かる橋はみな壊れていて車は通れない。調子の悪い車だが、流れを横切らねばならない。人間は降りて、車が加速してダッシュする。途中水の中で止まり、エンストをしたらお終いである。2回はらはらさせられたがうまくいった。ようやく金晶の顔がほころぶ。流れを迂回した後、道は神秘的な湖の左岸の原生林をゆく。午後5時半に措普寺に着いて今日の行程を終わる。運転手にとっては辛い1日だった。

措普寺（4120m）は湖の奥の谷にある。名利に相応しい雰囲気のある場所である。手前三方は針葉樹に囲まれ、裏手は岩壁・岩稜が屏風のように控えている。その間をルンゼ状の沢が上部の谷へ延びている。しかし、僧院の建物は、新しく建て替えられたためか、けばけばしくてチベット僧院の趣に乏しい。本堂は内装の工事中であった。我々が到着するやいなや、大勢のラマ僧や修行僧が集まってきた。寺に泊めてもらうためにレニーが交渉に

ゆく。レニーによると、活仏ははじめ渋ったが、機転をきかして、自分は徳格にある大僧院・竹慶寺の呬絨活仏（紅帽派のトップ）は親しい友人であると話したところ態度が急に変わったという。措普寺の活仏は呬絨活仏の生徒だった。お蔭で本堂の2階の一室を与えられたが、階段が急すぎて、夜中にトイレにゆくのは危険なので、テントで寝ることにした。金晶は盗難を警戒して車のなかで寝る。夜9時半5.5度C。見上げる満天の星空に鋭角的な岩稜がシルエットを描いている。

■措普寺と活仏

6月6日、晴。午前6時半8度C。日の出を待って裏手の斜面を登り、夏塞（5833m）北壁の姿を写真に撮る。雪が多く、肩幅の広いどっしりした山谷である。登り甲斐のありそうな山だ。キャンプでの朝食もお粥がベースである。夕べの残りの白飯から高圧釜で簡単にできる。タイヤが1つパンクしていた。昨日フィルムを呉れと言って断られたラマが嫌がらせをしたらしい。大勢のラマと若い修行僧が1日の仕事にでてゆく。薬草採り、薪集めなど、役割分担があるようだ。我々は9時半にテントを出発、僧院の裏手から花崗岩と灌木帯がモザイク状にせりあがる間を流れるルンゼを高巻きしながら谷の上部へ向かう。兩岸は手の切れそうな眩いばかりの花崗岩の岩壁である。クロアールにはまだ氷瀑が懸かっている。

「馬のドクター」がリードしてくれる。途中の



平坦なところに小さな寺と修行僧のテントがある。数十人の若い男女が学習に勤しんでいる。表情は明るく屈託がない。南側に谷を俯瞰すれば、僧院と原生林のなかに静謐さをたたえている濃紺の湖、そのさき草原の向こう側に夏塞から西に連なる5500mクラスの山々が望まれる。時空を超えて別世界に舞いこんだような錯覚にとらわれる。いたるところにシャングリラに相応しい舞台がある。地図によると、谷の上部には2つの湖があり、源頭には扎金甲博山塊第二の高峰(5725m)がある。湖からこのピークのプロファイルを撮ることが目的だったが、午後3時に活仏とのインタビューを約束してあるので、4500mの地点から引き返した。そこからは特徴のない5556mの岩峰は正面に見えるが、湖と5725m峰はまだ視界にない。ドクターの話しだと、私の足では湖まであと2時間はかかるという。体力の限界でもあった。下りでは尼さんの修行僧と一緒にいる。花を摘んで持ちかえるところだった。僧院や自分たちの部屋に花を飾ることも日課のようだ。

午後3時、予定どおり活仏とのインタビューを始める。活仏が自ら指揮して僧院の中庭の正面に会談の場所をしつらえる。活仏ひとりが机をまえにして椅子に座る。活仏の名前は根呷丁直。我々は地面に座る。30人ほどのラマと修行僧が集まってくる。通訳はレニーと中国語のできるラマがするが、意志の疎通は容易ではない。まず、来訪の目的を告げ、寺の建設のお役に立ててほしいと、200元(2600円)寄進してからインタビューにはいる。

活 仏「日本は仏教徒の国と聞いているが、チベッ

ト仏教とどう違うのでしょうか」

中 村「基本的には違います。日本の仏教は大乗仏教、すなわち、インドからチベット、中国を経て伝播された北伝仏教だからです。(宗教談義には自信がないので、すかさず話題を変える)この僧院に外国人が来たことはあるでしょうか」

活 仏「私がこの寺に来たのは三年前ですが、私の在任中には誰も訪れていません」

中 村「措普寺の歴史を教えてください」

活 仏「1260年頃に創建されました。700年以上の歴史のある由緒あるゴンパです。宗派は、私の帽子が象徴している紅帽派です。四川省のなかでは徳格、甘孜は紅帽派、理塘、木里は黄帽派です」

中 村「お寺の人員構成はどうでしょうか。また、修行僧はどんな勉強をしていますか」

活 仏「ラマは老若あわせて30人、修行僧は男200人、女100人ほどです。初級は経典、歴史、チベット語を、上級に進むと医学、地理、天文などを勉強します」

中 村「有難うございました。この僧院と素晴らしい自然環境を必ず日本に紹介します」

記念撮影を終えて寺を辞した。5時半に措普牧場着、空家になっているドクターの持家に泊まる。平屋でひと間のログハウス風の小屋だが快適である。近所から人が集まってくる。いい人たちだが、盗みにたいする罪悪感がないのだろうか。気をつけてはいたが、車のボンネットの上に置いて計測していたGPSが僅かの隙に消えていた。

扎金甲博と措普の人々

第2ラウンドのフィールドである川蔵公路北側の山々を整理しておこう。理塘高原の西縁に位置するが、行政区としては巴塘県に属する。措普牧場の長大な草原の谷をとりまく幾つかの山塊がその対象である。地図をご覧ください。北側の中心部が扎金甲博、東の端に岩と雪の独立峰的に際立った哈逮(5524m)がある。西の端には白玉へ通じる交易路の峠の北に5500mクラスの山塊が連なっている。谷の東南はすでに書いた夏塞山塊で、最高峰5833mの東西にそれぞれ5609m、5508mのピークが連なる。

扎金甲博の名称が載っている地図は甘孜藏族自治州地図(50万分の1)のみである。しかし、この地図には標高は記されてない。措普牧場のチベット族はジャージンチャム(Prince)あるいはジャージンジャボ(King)と、フィツ・ロイのような岩峰(5382m)を指して呼んでいるが、曖昧なところもある。5812mを最高峰とする山塊全体を扎金甲博とするほうが当を得ていると思う。山塊の南面は顕著な岩峰が目につくが、氷雪は少なく氷河の発達は乏しい。最高峰の頂上付近のクロアールにかかる懸垂氷河の他には氷河は見当たらない。しかし北面は分からない。

6月7日、晴。措普牧場を西へ、扎金甲博の最高峰にできるだけ近づくために、日帰りのトレッキングをする。出発の前に、無くなったGPSを届けてくれた者には金を払うし、欲しい食料をなんでも提供する、と村じゅうに伝えてもらう。が、結局戻ってこなかった。午前9時、馬5頭、馬方2人がきて出発。今日もドクターが案内してくれる。私は白馬にまたがり意気揚揚と牧草地を進む。広い草原の谷、ヤクと羊の群、放牧者の黒テント、チベット犬……東チベット高原の典型的な風物詩に心ゆくまで浸る。フィツ・ロイの岩峰は遠ざかり、5725mの雪の頂上が顔をだす。最高峰の南東面は幅広い急峻な側壁となり、数条のリッジとクロアールが懸かっている。が、山容は魅力がない。11時の小休止、昼食。薪をひろい湯を沸かしバター茶をつくる。行動食の甘いビスケットより、馬方たちの小麦粉を厚く焼いた硬いパンのほうがうまい。草地に大の字になって空を見上げ目をつぶる。すうっと眠りに引きこまれる。至福のひと

時である。

馬方に起こされて我にかえる。ふたたび出発。馬上でうつらうつらしながら進む。と、突然身体が宙にはね上がった。馬が跳び上がって走りだしたためである。気がついたときには、柔らかい草の上に尻から着地していた。岩や石の上に落ちなくて幸いだった。少し痛みは残ったが大過なかった。まったく予期しない新雪雪崩に一瞬のうちに飛ばされたような感じだった。馬が急に恐ろしくなったが、馬を替えてもらい、一行を追いかけた。午後1時すぎ、谷が大きく二つに分岐する手前、黒テントが集まっているところを今日の最終地点とする。永井さんが冬虫夏草を買うというので、テントの一つに入り、検分と交渉をする。質の良いのは一匹3元が相場で、値段は絶対に引かない。ついでに四方山話をしながら、彼ら習慣や生活ぶりを聞出した。纏めておこう。

(1) 黒テントの住人は女性と子供だけである。

彼女たちの仕事はヤクの世話(乳搾りも)、冬虫夏草採り、子供の面倒をみることである。一年中テントで暮らすことが多い。男は村の家に残っている。畑仕事や柵を作ったりする。(男の貢献度は小さいようだ。ドクターは、子作りが男の一番大きな仕事だ、と笑いながら言っていた。)

(6) 平年の措普牧場は冬場でも積雪は50センチ程度で、草を食べられるので家畜は放牧される。乳搾りのため村に下されるヤクもいる。去年は未曾有の大雪でたくさんの家畜が死んだ。政府はヘリコプターで食料や薬を届けてくれた。

(7) 今まで措普牧場にきた外国人を見たことはない。(この点ドクターも2人の馬方も同意した。)

午後2時半、黒テントの皆さんに別れを告げる。ほんとうに感じのいい人たちである。村の近くに戻ったところで、私を振り落とした白馬が嘶いたすぐあと、呼応するように遠くから嘶きが聞こえてきた。そして2~3分のうちに白い子馬が現れ、お母さん馬にすり寄ってお乳をねだっている。白馬は早く子馬のところに帰ったのに違いない。尻の痛みを忘れてほのぼのとした気持ちにな

る。5時過ぎに小屋に帰る。夜は雨となり雷鳴が轟く。

天気が変わりつつある。我々の旅は終わったことを予告しているようだ。車の具合が悪いし、尻の打撲の痛みも残っているので、第3ラウンドは断念して帰国することにする。

6月8日、午前7時8度C。雨は上がり、朝靄が美しい。フィツ・ロイの岩峰に去来する霧が夢幻的に変化し墨絵の世界をつくりだしている。措普牧場は違った姿をみせる。

水汲みなど設営の手伝いに雇った青年の母親の話をレニーが真剣に聞いて頷いている。その話しに私も割りこませてもらう。チューシさん、57歳。彼女は10歳のとき重慶にゆき3年間勉強して戻ってきた。その頃、中国のチベット侵攻が始まり、この一帯も激しい戦場となった。1959年にここで父親と長兄が殺された。次兄は刀で腹をえぐられ重傷を負った。親戚の人たちもたくさん殺された。自分はなんとか逃げのび、母親のところに身をよせたという。中国による弾圧の記憶はカンバたちの脳裏から容易には消えないのであろうか。

この平和そうにみえる楽園に生きる年配者たちの心の奥底には生々しい傷跡が今も残っているのであろう。当時アメリカのCIA（中央情報局）はチベット支援のために、250人のカンバを密かにアメリカに連れてゆき、コロラド州の秘密基地で訓練をし、ゲリラとしてチベットに送りこんだ。この工作は無駄に終わったが、250の中に措普の出身者もいたかもしれない、とチューシさんの話を聞きながら想像した。

「再見、措普のみなさん」8時半、ドクター、馬方その他の大勢の村人に見送られて帰途についた。未踏の山や自然の発見は刺激的で、興奮させられるが、人々との温かいふれあいは旅の成果をより豊かにしてくれる。この日は理塘泊。6月9日、康定泊。キリスト教会を訪ねて、老宣教師とインタビューする。このことは別の機会に書きたい。6月10日、成都帰着。成都に着いてから成都を発つまで、18日間の全ての費用はUSドルで1人2,500ドルであった。旅の終わりは上海の夜で、和平飯店のジャズ・バンドに3曲リクエストしてオール上海のムードを楽しんだ。

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN

岳人

毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

2000年

特集

- | | |
|-------|------------------|
| ★ 1月号 | 雪山入門 日本の山を楽しむために |
| 2月号 | 現代山岳スキー 思想・用具・記録 |
| ★ 3月号 | 日帰り縦走、ひと味違うハイキング |
| 4月号 | 日本列島、恵みのブナの森を訪ねて |
| ★ 5月号 | 陽光の日本アルプス |
| ★ 6月号 | 日本全国、知られざる花の名峰 |
| 7月号 | 夏こそ、海と島の山旅 |
| 8月号 | はるかなる源流の峰々へ |
| 9月号 | 一度は泊まろう静寂の山小屋 |
| ★10月号 | 紅葉のみちのくの山並み |
| 11月号 | 冒険、修験、岩塔の山 |
| 12月号 | 野生動物と出会う山 |

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎(03) 3740-2674 (直)

東京本社 全国の書店で発売中／中日新聞販売店でも取りつぎます

登山4団体による

ヒマラヤ登山者アンケート調査

今回の「登山4団体共同」による「ヒマラヤ登山者アンケート調査」は、昨年12月に日本ヒマラヤ協会の呼び掛けに3団体が賛同して実施された。

実施に当たっては、各団体から「実務担当者2名（理事級）」が出て実務を執り行なった。2月3日に第一回担当者会議が行われ、以後3月1日、4月3日と会合が持たれ主にアンケート内容につ

いて協議を行った。4月以降は何度もアンケート内容についてFAXのやり取りによって修正が行われ、5月6日に最終案が纏まった。

アンケート対象者は、千名を目標としたが、リストアップは困難であった。最終的にはH A J、労山、J A Cのリストから目標をクリアし、発送作業を終えたのは6月5日であった。（山森）

ヒマラヤ登山者アンケート調査のお願い

私たち全国的な規模を有する登山4団体は、国の内外からヒマラヤ登山を始めとする登山情報の提供を求められておりますが、残念なことに全体的で正確な情報はどの団体にも集積されておられません。

近年、ヒマラヤ登山の受入れ国側の規制緩和が進んだこと（国内の推薦状が必要なのはネパールだけ）や、日本の航空業界の進展によって日本の各地方から直接ヒマラヤ諸国への渡航が可能になったことなどにより、ヒマラヤ登山を実施する登山者の実態（いつ、だれが、どこへ行くのか）を事前に把握することが相当困難になっております。

この結果、ヒマラヤ登山者向けに各団体が実施している「遭難防止のための研修会」などの呼び掛けすらできない状況にあります。このことは登山者にとりまして大変な不利益であります。

私たちは、このような状況を踏まえて、登山界をとりまく環境の変化に対応するために、ヒマラヤ地域を中心とした「海外登山情報センター（仮称）」の設立を検討すべく合意したのは平成10年春のことでした。

同センターが設立されれば、登山者の協力を得て別紙添付した簡便な「計画書／報告書」を集積し、これらのデータベース化を効率良く行えます。この結果、国の内外から求められている情報の提供も可能になります。また、登山者は、必要に応じて各団体が開催する「遭難防止のための研修会」に参加し、知識を身に付けることによって「充実した安全登山」を楽しむことができるようになります。

しかし、登山界の状況は、私たちの予想をはるかに超えるスピードで変化しており、設立を検討している「海外登山情報センター」に対して、登山者がどのような役割を期待しているのかさえ把握できないのが現状であります。

そこで私たちは、主としてこのセンター設立の基礎資料とするために、ヒマラヤ登山経験者を対象としたアンケート調査を行うこととしました。

このような趣旨をご理解いただきまして、このたびの調査にご協力を賜りたく宜しくお願い申し上げます。なお、ご多忙とは存じますが、アンケートの返送につきましては7月10日までにお願い致します。

平成12年6月 （社）日本山岳協会 日本勤労者山岳連盟 （社）日本山岳会 日本ヒマラヤ協会

（事務局） 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7 萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会内 電話 03-3988-8474

アンケート内容と結果の概要

[発送人数1000人 戻り数67人 有効回答者数351人(37.6%)]

質問事項 (特に指定する以外、回答は主なもの一つに○印を付けて下さい)

1. あなたはヒマラヤ登山の記録の整理についてどのようにお考えですか？

A. 継続した記録の整理が必要だ	307名(87.5%)
B. 必要な隊は報告書を纏めればよい	32名(9.1%)
C. 記録の整理は必要ない	0名
D. その他(	12名(3.4%)
2. あなたはヒマラヤ登山の知識や情報をどのような方法で学び収集していますか？
(主なもの3つを選んで下さい) [複数回答のため回答者数と一致しない]

A. 研究会、研修会に参加して	173名(18.0%)
B. 経験者に直接会って	194名(20.2%)
C. 報告書	289名(30.1%)
D. 国内山岳雑誌	224名(23.3%)
E. 海外山岳雑誌	35名(3.6%)
F. インターネット	23名(2.4%)
G. その他	23名(2.4%)
3. あなたが学び収集した知識や情報の程度は登山実行の際、いかがでしたか？

A. ほぼ満足した	69名(19.7%)
B. まあまあであった	172名(49.0%)
C. やや不足していた	76名(21.7%)
D. 不足であった	21名(6.0%)
E. その他	13名(3.7%)
4. あなたはヒマラヤを中心とした海外登山情報を一元的にまとめ、情報を求める登山者やマスコミなどに有料で提供する機構「海外登山情報センター(仮称)」を、登山団体が共同で設立することについてどのように思われますか？

A. 賛成である	288名(82.1%)
B. 反対である	4名(1.1%)
C. 各団体が独自に対応すればいい	15名(4.3%)
D. 分からない	26名(7.4%)
E. その他(	18名(5.1%)
5. あなたは上記センターが設立された時、センターの基礎資料となる計画書や、報告書(同封した見本の様式)を自費で提出することについてどのようにお考えですか？

A. 両方共提出する	269名(76.6%)
B. 計画書は提出する	14名(4.0%)
C. 報告書は提出する	20名(5.7%)
D. 両方共提出しない	7名(2.0%)
E. その他	41名(11.7%)

6. あなたは上記センターが設立された時、センターからの情報提供（有料）について何を希望されますか？（主なもの3つを選んで下さい） [複数回答のため回答者数と一致しない]

- | | |
|---------------|--------------|
| A. 登山記録 | 296名 (29.4%) |
| B. 登山規則と手続き | 231名 (22.9%) |
| C. 現地情報 | 295名 (29.3%) |
| D. 事故防止対策 | 55名 (5.5%) |
| E. 環境保護対策 | 20名 (2.0%) |
| F. トレーニング | 12名 (1.2%) |
| G. 低圧室・低酸素室情報 | 9名 (0.9%) |
| H. 公募隊情報 | 18名 (1.6%) |
| I. 登山計画立案 | 30名 (3.0%) |
| J. 研修会開催情報 | 24名 (2.4%) |
| K. 持参する薬品 | 16名 (1.7%) |
| L. その他 | |

7. あなたは高山病や雪崩などの事故防止対策、環境保護のためのテイクイン、テイクアウトの研修会などへの参加についてどのようにお考えですか？

- | | |
|--------------------|--------------|
| A. 積極的に参加したい | 64名 (18.2%) |
| B. 案内があれば参加する | 51名 (14.5%) |
| C. 参加しない | 22名 (6.3%) |
| D. 日程や費用が折り合えば参加する | 205名 (58.4%) |
| E. その他 | 9名 (2.6%) |

8. あなたはヒマラヤ登山を实践する時に、テイクイン、テイクアウト運動についてどの程度行っていますか？（8.9.10の項目は、未記入者2名あり、総数は349名である。）

- | | |
|-------------------------------------|--------------|
| A. ほとんど実行していない | 17名 (4.9%) |
| B. ほとんど実行している | 187名 (53.6%) |
| C. テイクアウトは実行しているがテイクインはあまりしていない | 30名 (8.6%) |
| D. BC周辺のテイクアウトはしているが上部キャンプはあまりしていない | 74名 (21.2%) |
| E. 分からない | 41名 (11.7%) |

9. あなたは国内登山やヒマラヤ登山を实践する時に、遭難対策用の保険や共済制度についてどのようにお考えですか？

- | | |
|--------------------------------|--------------|
| A. それぞれの団体に独自の制度をつくれればいい | 21名 (6.0%) |
| B. 登山者が組織に関係なく加入できる共済制度をつくるべきだ | 260名 (74.5%) |
| C. 民間の保険でいい | 37名 (10.6%) |
| D. 分からない | 15名 (4.3%) |
| E. その他 | 16名 (4.6%) |

10. あなたは今後もヒマラヤ登山を実施しますか？

- | | |
|----------|--------------|
| A. はい | 241名 (69.1%) |
| B. いいえ | 10名 (2.9%) |
| C. 分からない | 98名 (28.1%) |

11. あなた自身のことを教えてください。

(フリガナ)

氏 名 / S 年 (1 9) 月 日生 (歳)

(男性・女性) 住所 〒

電話番号 () - FAX -

家族構成 配偶者 有 無 子供 人 e-mail

身長 . cm 体重 . kg (喫煙 有・無) (飲酒 有・無)

日本国内主要登山歴 (あなたの登山の中で重要と考えられる登山を5つ)

ヒマラヤ (ネパール、パキスタン、インド、アフガニスタン、ブータン、中国、旧ソ連)

登山経験

- 1) 最初にヒマラヤ登山を行った年度: 1 9 年 山名:
- 2) 最後 (最新) にヒマラヤ登山を行った年度: 1 9 年 山名:
- 3) マカルー (8,463m) 以上の標高の峰への登山回数 回、登頂回数 回、
うち無酸素登頂回数 回、隊長を務めた回数 回、
- 4) 上記以外の 8 0 0 0 m 峰への登山 回数 回、登頂回数 回、
うち無酸素登頂回数 回、隊長を務めた回数 回、
- 5) 7 0 0 0 m 峰への登山: 回数 回、登頂回数 回、隊長回数 回、
- 6) 6 0 0 0 m 峰への登山: 回数 回、登頂回数 回、隊長回数 回、

ご協力ありがとうございました。

回答者の地域別・年齢別・登山回数別分布状況

() 内は女性

	2 0 代	3 0 代	4 0 代	5 0 代	6 0 代	7 0 代	合計
北海道	2	5	4 (1)	9 (1)	1	0	2 1 (3)
東 北	0	4 (2)	1 0	8	3	0	2 5 (2)
甲信越中京	4 (1)	1 5	2 1 (2)	1 7 (1)	6	1	6 4 (6)
関 東	7 (1)	2 4 (1)	3 6 (5)	2 8 (4)	1 0 (2)	1	1 0 6 (13)
東 京	4	2 2 (3)	1 6 (3)	2 0 (2)	6 (1)	1	6 9 (9)
近 畿	1	5	7	1 1	6 (1)	1	3 1 (1)
中国四国九州	2	1	1 4 (1)	1 3	4	1	3 5 (1)
合 計	2 0 (2)	7 6 (7)	1 0 8 (12)	1 0 6 (8)	3 6 (6)	5	3 5 1 (35)
1 回	6 (1)	2 5 (3)	2 2 (4)	2 2 (3)	8 (1)	2	8 5 (12)
2 回	8	1 4 (3)	2 7 (4)	2 5 (2)	5	0	7 9 (9)
3～5回	6 (1)	2 5	3 7 (1)	3 3	1 4 (4)	2	1 1 7 (6)
6回以上	0	1 2 (1)	2 2 (3)	2 6 (3)	9 (1)	1	7 0 (8)

地域ニュース

《ネパール》

国立公園入園料値上げ

5月23日より、ネパール国立公園の入園料が下記のようになった。

アンナプルナ 2000Rs

クーンブとランタン 1000Rs

これまで650Rsの場所は 1000Rs

《インド》

IMFが新開禁18ピークを発表

	山名	標高	東経	北緯	地域
1	Changuch	6322	80° 02'	30° 17'	ウッタールP州
2	ChaukhambaⅢ	6995	79° 15'	30° 43'	"
3	ChaukhambaⅣ	6854	79° 15'	30° 43'	"
4	CB-9	6108	77° 27'	32° 34'	ヒマチャルP州
5	無名峰	5852	77° 14'	32° 28'	"
6	"	5860	77° 38'	32° 15'	"
7	"	6090	77° 42'	32° 14'	"
8	"	5921	76° 01'	33° 41'	カシミール州
9	"	6045	76° 05'	33° 43'	"
10	"	6200	76° 06'	33° 48'	"
11	"	6000	76° 08'	33° 27'	"
12	"	6415	76° 08'	33° 35'	"
13	"	6080	76° 22'	33° 37'	"
14	"	5900	76° 35'	33° 35'	"
15	Chorten Nyima	6927	88° 11'	27° 57'	シッキム州
16	Khame Khang	6601	88° 39'	27° 35'	"
17	Kang Chaung Kang	6766	88° 11'	27° 52'	"
18	Lonqpo	6954	88° 12'	27° 53'	"

※全て未踏峰

《中国》

イエティ隊がチョー・オユー登頂

イエティ同人がチョー・オユーに派遣した登山隊（小泉崇隊長〔64〕ら13人）は、5月12日に青

木正次(64)、平田恒雄(65)、鈴木理裕(33)とシェルパ3名が登頂。14日に青黄靖(38)、荒木富美雄(50)、三渡忠臣(60)とシェルパ3名。16日に牧野総治郎(46)、寺山元(33)、高島聡(34)とシェルパ2名が登頂した。

平田恒雄は、日本人の八千メートル峰最高令登頂者となった。また、寺山元は、山頂から7,100mのC2までスキーで滑降した。ランニング登山を目指していた香川澄男(63)は体調不良で下山した。

ヒマラヤから

GⅡ便り

梅雨の頃いかがおすごでしょうか。私は信州大学ガネッシュ・ヒマールⅡ峰登山隊の登攀隊長として、3月22日よりネパールにいます。登山は、岩と氷の難ルートに手を焼きましたが、5月23日に、私と花谷隊員がアタックをかけました。しかし、モンスーンの悪天候に阻まれ、山頂を目前に断念しました。残念ですが、限られた戦力でベストを尽し、無事下山できたことで満足しています。6月18日に帰国します。

6.14 カトマンズにて 田辺 治

K2便り

アッサラーム アレイクム

出発に際しましては大変お世話になりました。お陰様で現在イスラマバードにて準備活動を致しております。結果がどうあれ、隊員一人一人が納得のいく登山が出来るよう頑張ってくださいと思います。

2000.6.15 日本K2登山隊2000

東京集会のお知らせ

日 時 8月28日(月) 午後7時～
内 容 暑気払い
場 所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

『カラコルム』の特色

吉田 漱

いきなり大きなスクリーンに映されたのは蒼天に突き出したカラコルムの鋭い鋼の峯々で巨大な氷河の氷塔やクレバスなどであった。

それがまず井上重治氏の世界に魅せられたはじめて、やがて短歌入りの写真集『カラコルム氷河紀行』の著作を知り、ひきつづいて歌集『カラコルム』を読む。

ドア失せて速度計壊れしわがジープ燃料計の確かなるに頼る

わがジープたちまち抜きしワゴン車の彼方に停まる黒煙吐きて

戒厳令解けて入り来しギルギットの街角の土囊にライフル光る

これはカラコルム行の入口である。

ヒマラヤは紹介されることが多いし、実際ナンチェン・バザールあたりに出かけてエヴェレストを直接仰ぐ人も増えた。が、西北のカラコルム山脈となると、エヴェレストに次ぐK2（8,611m）を擁し、観光気分をよせつけない。

深々と天の最中に突きたてるネザーピークの秀に小雪見ゆ

濃きガスの吾を包みて唐突にパトンダスの雷鳴横より来る

夕暮れて風たちくればマシャブルムの峰に炎なす雲立ち沈む

むれ立てる鋭き岩峰ことごとく長く影曳きチャラクサ谷暮る

しかしながら著者が写真でも歌でも目指すものは実は氷河で、そこに大きな特色がある。

氷河については百年余り前、ウインパーの『アルプス登攀記』にすでに学説が紹介され、彼の意見も述べられているが、日本では専門研究者はあまり居ないから、氏が「ヒマラヤ」に発表された「カラコルムの氷河」「同・続」（1995～1997）などの論文、写真集、そして歌は重要である。

暁のモレーンに立てば蛇行するインダス川に赤光走る（モレーン＝堆石）

暗み来るパスーの川面に夕光の匂ふがごとき水晶の明し（水晶＝水晶状の氷塊）

よもすがら落石つづくナルタルの氷河湖の鎮もる朝のひとつき

鎮もれるパスー氷河に陽ののぼり目覚むるごとく氷塔染まる

その氷河も一ヶ所ではなく、バトーラ山群ではパスー氷河、マッシュャブルム山群では、ゴンドコロ氷河、あるいはK6、K7を見上げるチャラクサ氷河、ラカボシ、ディラン山群南面のヒナルチェ氷河などという特殊な地域となると、手もちのカラコルム関係の本を動員し、スイス版25万分の1の地図を展げねばならない、というように井上氏の著作は格別にかラコルム山群に入れこんでいる。

が、カラコルムの山々に魅かれた人々に短歌の関心があるかどうか、また山の好きな歌人でも、カラコルムの氷河となると歯がたたないかもしれない。

それだけに奥深い魅力を秘めている写真集と歌集ということになるだろう。

が、写真集に高山の花に集中したパートもあり、歌集には

春畑も道もしろじろ埋めつくしカイバル村は杏の花ざかり

風寒きクンジュラブ峠に竜胆の小花を見出で思はずかがむ

（クンジュラブ峠＝高さ4,703m 中国・パキスタン国境）

等々があり、

夕暮れのホバル氷河をつきづきに薪を背負へる児ら渡りくる

青き眼のパスーの児らは手真似にて妻の教ふる折鶴を折る

等、山の民の姿も活写されていて歌の世界も広い。

（文化書房博文社刊 1900円）

（編注）筆者は短歌結社「未来」所属

スロヴェニアの軌跡（下）

中 川 裕

1996年の明暗

1995年、スロヴェニアの3人のクライマーが、クーンブ、アンナプルナの喧騒をよそに、登山隊などをほとんど迎える事がなくなった西ネパールを訪れた。母国の若いクライマー達の腕試しの場所探しが目的である。目的を果たした3人のうち2名は、帰国後の冬、母国の山で雪崩により遭難、死亡してしまう。けれども、彼等の意思は適切な人々によって受け継がれた。

ロマン・ロバス隊長率いる12名のスロヴェニア山岳会隊は翌96年秋、西ネパールのアピ（7132m）、ナンパ（6755m）、ボバイェ（6808m）の許可をとり10月16日に3650mにベースキャンプを設けた。順応登山中の22日、A・シュトレムフェリ、M・プレゼリのピバーク地を雪崩が襲い、二人は負傷して下山した、登山隊はエースを欠いたにもかかわらず、それぞれバリエーションルートの初登攀（ボバイェは初登頂）を一撃で成し遂げ、彼等の実力を世界に知らしめた。もっともこの年からネパール政府が打ち出した、西ネパールへの誘致策の恩恵を受けることなく、3人もの連絡官に給料を支払わなくてはならなかった事については、彼等の計算外であった様だ。



この年の春、もうひとつの輝かしい登攀が、トマジ・フマルとヴァニャ・フルランによって成されている。こちらは、名前は知らなくとも、その姿はあまりにも有名な山、アマ・ダブラム北西壁である。二人はエベレスト街道からもよく見えるこの壁を、3日間で登りきり、ノーマル・ルートを下降した。あたかもこの年は、日本人女性も含んだエベレストの大量遭難である。こうした成果の一方、先の2名が雪崩でなくなったおなじ山で、8月にフルランが墜死する。30歳の若さだった。10月にはジャンヌ・東峰東壁への順応登山中の二人が悪天の中で行方不明となってしまう。こうして1996年はスロヴェニア登山界にとって忘れられない年となった。

トマジ・フマル

新たなヒーローの出現

1997年秋、トマジ・フマル以下5名のスロヴェニア人と8千m峰14座完登者のメキシコのカルロス・カルソリオはクーンブで活発な登山を行った。これらの登山については既に「ヒマラヤ」誌上で紹介したとおり、ロブジェ東峰、プモリを登った後に最大の目標、ヌプツェ西壁を登ったトマジ・フマル、ヤネズ・イエグリッチのうち、北西峰付近で大ベテランの氷のスペシャリストであるイエグリッチが頂稜から墜死してしまう。

トモ・チョセンがローツェ南壁の「疑惑」のなかでスポーツクライミングに専念してしまった後、次のヒーローと注目されていたスベッチッチがガッシャールムIV峰西壁で消息を絶ってしまった。登山界に待望のヒーロー、トマジ・フマルがこの登山で世界的に認知された。

1998年春、スロヴェニア山岳会はトネ・シュカリャ率いる14人の若手中心の隊をダウラギリI峰（8,167m）に送り、7名を頂上に送り込む。7人

の内には誰も7千mの経験者はいなかったという。参加メンバーの中には8千m峰に10座登っているヴィクトル・グロシェリの名前がある。

1999年秋のトマジ・フマルのダウラギリI峰南壁ソロは以前にお伝えしたとおりだ。高度においてローツェに及ばないが、技術的難度と危険性においてそれを上回る登攀である。同じ頃、A・シュトレムフェリとM・プレゼリを含む5名が、ギャチュンカン(7952m)の北壁、チベット側の標高差2千mに及ぶミックスの壁に取り組んでいた。この隊は3パーティに分れて登攀し、トマズ・ヤコフィック、ピーター・メズナーが10月31日、マルコ・カー、メイティック・ヨストのペアと、プレゼリ、シュトレムフェリは11月1日にそれぞれ2ピバークで登頂して下降した。こうした壁を短期間に登る、技術とスピードもさる事ながら、こうしたルートを探し出すセンスにも驚かされる。良いヒマラヤ登山をするためには、こうした山を知っていなくては不可能である。その為には自分で多くの報告書や地図に目を通し、歴史を知る必

▼ギャチュンカン北壁(中村正勝氏提供)

要がある。今の日本の登山者に最も欠けている事かもしれない。トレーニングに関しては一流だと思うのだが。

こうして、スロヴェニア人達は独立というハードルを越えた後にも、ヒマラヤの舞台でエネルギーを燃やしつづけている。ポーランドは社会主義から脱却した後に、急速にそのパワーを失ってしまった。ソビエト崩壊後のC I S諸国は、数の上ではそれまで以上の登山隊をヒマラヤに送りつづけている。(経済状態を考えればこれも驚異的な事である。)しかし、そのほとんどが8千m峰、ノーマルルートへの登山であり、実力の高さは十分理解できるのだが、質という面ではいささか見劣りがするのを否めない。そのなかでスロヴェニア人の活動は異彩を放っている。

3回にわたってユーゴスラビアの一部であった時代から今日までのスロヴェニア人の行ってきた主要な登山を紹介してきた。彼等は1975年マカルー南壁、1977年、ガッシャーブルムI峰西稜、1979年エベレスト西稜、1988年チョー・オユー北壁、



1989年シジャパンマ南壁、1990年ローツェ南壁、1991年カンチェンジュンガ南峰南西稜と8千m峰にスロヴェニアルート（バリエーション）を拓いて来た、独立したのは1991年だが、彼等は既に1970年代から世界のトップレベルの登山を実践してきたことを、わかっていただけたと思う。どうして彼等はこれほどの登山を実践できるのだろうか。

なぜこれほど彼等は強いのか

ユーゴスラビア時代から、スロヴェニア山岳会は国や企業からの資金により運営され、山岳会に入れば無料で一流の現役クライマーから直接指導を受ける事が出来るようになっていたという。もちろん無料である。そして、優秀なクライマーには登山に専念できる環境が整えられる。主要な新聞には登山を専門に扱うスペースが用意され、毎週世界の主要な登攀記録が紹介されており、クライマー達は国民から十分に理解され尊敬されているようだ。独立後も基本的にはこの状況に変化はない。そして、スロヴェニア山岳会は若手を育てる遠征を何度も企画している。さらに意欲的な登山への資金援助を行っている。

この国の自然も彼らを鍛える重要な要素となっている。この国はアルプス山脈の東端に位置し、石炭岩地帯が広く分布している。カルスト地形のカルストとはこの国の地方名からとられたものだ。岩山が多く分布し、夏には多くの400から800mの脆い岩が困難で危険なルートを提供しているという。冬には雪と氷をまとい、より一層クライマー達を鍛え上げてくれる。

独立後の状況について、1979年のエベレスト西稜から1991年のカンチェンジュンガ南峰南西稜、そして昨年のギャチュンカン北壁という20年以上にわたってトップレベルのヒマラヤ登山を実践してきたA・シュトレムフェリは、社会主義の保護が消え、資本主義の熱気を帯びた社会の中で「経済（競争社会）と同じように登山者達も勇気を競っている。」と言っている。したがって今、昔のような強力な登山隊を組むのは不可能だと考えている。しかし、現在そうした登山隊でトップレベルの登山が出来るのであろうか。

1975年のイギリス隊のエベレスト南西壁を超え

る登山が、79年のスロヴェニア隊の西稜である。80年のポーランド隊の冬季エベレスト登頂は、こうした極地法の頂点を成すものであろう。その集大成としてあったのが89年旧ソ連隊のカンチェンジュンガの完全縦走である。90年のチョセンのローツェ南壁ソロは新しい時代の幕開けにふさわしい登山であったと思う。この時を境として、大半のヒマラヤニスト達が8千m峰ノーマルルートへと集中して行く。登山の記録も、登山隊や国籍では分類できないほど混沌としてきており、高額な登山料を分担するための便宜上の「登山隊」が多く出現し、エベレストではシェルパが、登山の主要な部分を管理する傾向がますます大きくなってきている。ガイド登山隊以上にシェルパに依存した登山隊も多い。その中で登山者達は個人的な「記録」の追求へとその嗜好を移している。そうした中で、スロヴェニア人達が他に登山者のいない6、7千mに通い続け、チョセンやフマルのような完全な単独登山を実践した者以外でも、ほとんどザイルを結ばない、必要最低限のパートナーとの登山を行っているのは、時代の流れとして、そうした個人の行動が前面に出る事は当然のことであり、彼等の姿勢からは、ヒマラヤの楽しみ方が、まだまだ多くある事を我々に教えてくれる。

1975年のマカルー南壁から25年、四半世紀にわたり、人口わずか二百万人の小国が、ヒマラヤの桧舞台で常に第一線で活躍しつづけてきた事実には、驚きの念を禁じえない。最後になるが、1979年にアンナプルナ北面、マナンに開設された登山学校はスロヴェニアが講師を送り続けてきた。現在も存在しているこの登山学校はすっかりネパール登山界に根づいている。この事からもこの国のヒマラヤでの活躍がまだまだ続く事は、疑い様がない。

この稿を書くにあたり、アメリカの雑誌「ロック アンド アイス」の74号とAAJの各号、いくつかのホームページを参考にした。本来であったらスロヴェニアのクライマーに直接会って話をしたかったのだが、現在のところそれはかなわなかった。とても残念である。

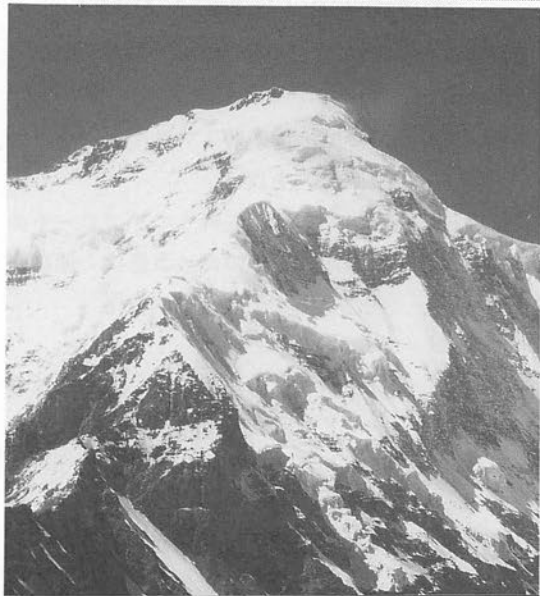
K 2 (8,611m)

1997年の日本山岳会東海支部隊以来登頂者が出ていなかったK 2のミレニアム・ファーストサミットは6月26日に韓国隊 Kang Yeon Ryong, Yun Jung Hyna, Joo Woo Pyong, Park Jung Hun の4名によって成された。Parkは酸素ボンベを使わなかった。その後2次隊4名も登頂した。ルートは南南東リブ。韓国隊は昨年に引き続きの挑戦。

その後のバルトロは天候が安定せず、韓国隊以後7月20日までの間、登頂者はいない。H・カーマランダーは帰国を決めたようだ。前号でお伝えしたウム・ホンギル率いる韓国隊もやっている。隊員12名、3名のバルティ・ポーターのほかに4名のネパール人を連れてきていると言う。パキスタンでは現在シェルパ等がパキスタン国内で仕事することは禁じられているはずなのだが。

北面でも悪天で活動ができない状況のようだ。中国側にはアメリカ隊、中国と台湾合同隊、日本のクライミング・ファイト隊、そしてメキシコ＝スペイン隊が入山中だ。アメリカ隊は18人という大所帯、けれども実際は4つの国際隊に分れている。資金・装備も豊富である。5kmの固定ロープを持ってきたが、中湾合同隊、日本隊はそれぞれ2kmくらいしか持ってきておらず、スペイン隊に至っては全く持ってきてはいないという。悪

▼スパンティーク・ゴールデンピラー



▲ムスターグ・アタ東稜

天、降雪の中で下部ルートのロープの張り替えが必要になっており、メキシコ＝スペイン隊はアメリカ隊に4千ドルの固定ロープ使用料を支払う事で合意したという。

ブロード・ピーク (8,051m)

7月7日、8日に5隊が頂上アタックをしたようだが、7,700mで深雪の為に断念。その後、悪天期間となり成功した隊はないもよう。すでにイギリスのガイド隊は登頂を断念、帰路についた。

スパンティーク (7,027m)

1987年にイギリスのミック・ファウラーとヴィクター・ソングースによって初登攀された北西壁ゴールデンピラーに新たなラインが引かれた。

ロシアのミハイル・ダヴィとアレクサアンダー・クレノフは6月7日から18日までの実に12日連続で登攀し、ピラー上半分により挑戦的なラインを追加し、19日にBCに戻った。

ムスターグ・アタ (7,546m)

ダニエル・メーザー (36) 隊長以下4名のアメリカ隊が東稜の初登攀に成功した。

一行はいったん西面ノーマル・ルートから6月24日に登頂。その後東面に移動、東稜を忠実に登り7月16日に隊長とジョン・オットー (29)、ウォルター・ケルター (32) が登頂。ノーマルルートを下降した。

事務局日誌(7月)

- 1日(土) 吉尾弘追悼会(遠藤、山森、尾形、中川)
 2日(日) 静岡県山岳連盟海外登山研究会(於、静岡市、山森)
 3日(月) CMAから若尾峰へのアプローチの道路が大洪水のため改修中と連絡有
 5日(水) スパンティーク隊ビザ取得
 7日(金) ヒマラヤ345号発送
 8日(土) 合同家族会&合同壮行会(かんぽヘルスプラザ東京。壮行会90名)
 10日(月) スパンティーク隊先発(岩崎洋、鈴木正典)出発
 13日(木) 保坂昭憲監事長女通夜(於、郡山、山森、天城)
 14日(金) 登山4団体三役懇談会(於、南池袋、酒井、山森、八木原、尾形、中川、野沢井、総勢19名)
 スパンティーク隊5名出発
 16日(日) 東北海外登山研究会チョモランマ隊

報告、祝賀会(仙台、山森)

- 18日(火) CMAヘルオニ隊費用送金
 25日(火) 登山4団体ヒマラヤアンケート調査
 実務担当者会議(HAJ、山森、野沢井)
 28日(金) ルオニ隊、山森隊長以下6名出発
 31日(月) 東京集会(5名)
 [おわび] 平成12年会員名簿中、福岡県の松本
 徹夫様は終身会員であります但し手違いにより◎印
 が抜けてしまいました。おわびして訂正します。

ヒマラヤ No.346 (9月号)

平成12年8月10日印刷 12年9月1日発行
 発行人 山森欣一
 編集人 山森欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ

**トレッキング・
登山隊の許可
取得から航空券・
現地手配までお引き
受けいたします**

～ネパール・インド・ブータン・
パキスタン・中国・
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア



**株式
会社**

西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)

P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL

☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに！



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638

キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004